

「生命の教育」創始者谷口雅春先生 今月の言葉

親の心を変え、子供に「神の子、無限力」の自覚を

子供を萎縮させる言葉を

□にしていますか

多くの子供達は、親が間違った心の波を起し、間違った言葉の波を起している為に非常に損われているのであります。多くの人たちは、子供を愛するあまりに悪しきことばかりを見附けて、「お前はここがわるいのだ」ということを始終言うのであります。そう言われるとその子供は萎縮してしまいます。そういう子供は、たとい勉強は辛うじてよく出来たにしても、大いに伸びると

いうことは出来ないであります。「勉強しろ、勉強しろ」と言わなければ勉強しないから、已むを得ず「お前はそんなことでは出来ないから勉強せよ」と言うのだという人があるかも知れませんが、「勉強せよ、勉強せよ」と口癖のように言うのと、いくら勉強しても却って心に憶えないのであります。これは又おかしい現象であります。原理は簡単です。「勉強せよ、勉強せよ」というような親は、子供に対してどういう心の態度を執っているかと言いますと、「お前は出来がわるいのだよ」という考えを懐いているのであります。出来るに定つておれば、「勉強せよ」とは申しません。「出来がわるい」

と信じているから、「勉強しろ、勉強しろ」ところうい
のであります。

「うちの子供は出来が悪い」と、言葉に出さなくとも、
心に念^{おも}うだけでも一つの波を起すことであります。親又^{また}
は教育者が、心の中で、「この子供は出来がわるい」と
いう精神波動を起しまして、その子供をそういう心で見
詰めている限りは、その子供は決して学習がよく出来る
ものではありません。勉強室にしまして、勉強している
ような真似^{まね}をしておつても、心は親の心で縛^{しば}られており
ますから、勉強が愉快^{ゆかい}でないのであります。そういう場
合には、勉強室に坐^{すわ}っておりますと、何となしに窮屈^{きゆうくつ}
な、縛られたような感じがいたしますので、その窮屈な
中にいるのではのびのびと生命が生長しませんから、そ
こでいくら勉強しても深く心に愉快^{きせき}が刻まれるというこ
とがないのであります。その為^{ため}に折角勉強しても能率が
上らないのであります。

(新編『生命の實相』第47巻17～19頁)

人間は一旦憶^{たんおぼ}えたものは決して忘れない

それから、もう一つ教育の上で必要なのは、人間は一
旦憶^{たんおぼ}えたことは忘れるものでないということを自覚する
ことが必要であります。多くの人達は自分の頭は物憶え
が悪いのだと信じている人がありますが、そういうふう
な人はその信念に依^よつて、折角記憶の罅^{ひん}の中に一ぱい記
憶の内容が這入^{はい}っているけれども栓をして出ないように
しているのです。自分の記憶の壺^{つぼ}からは決して出ないの
だと思つて、その思いの栓で蓋^{ふた}をしているのです。その
邪魔物のその栓を引抜^{ひきぬ}いてしまったならば、一遍憶えた
ことは必ず必要な時に悉^{ことごと}く思い出せるのであります。

(新編『生命の實相』第47巻36～37頁)

子供のときから「人間神の子」の自覚を与えよう

人間の記憶というものは一旦潜在意識に印象されたこ

とは永久に忘れるものではない。(中略)だから学校で一度習ったことを思い出す位は何でもないのであります。(中略)勉強しないといても、やはり学校で先生に習った時には、本も見、先生の話も聞いているのです。本を見、先生の話もきいているからやはり一度は頭に這入っているのです。ですから、一遍習ったことをいつでも思い出せる状態に置いたならば、家へ帰っても学習しなければならぬということは必ずしもないのであって、一遍憶えたことを試験の時や入用の時に思い出しさえすれば、それで勉強しなくても百点がとれるということになります。それが、憶い出せない。憶い出せないようにしているものは何であるかという、「人間は直ぐ忘れっぽいものである」という一つの「間違の信念」であります。(中略)「人間は忘れる動物だ」との間違の信念を如何にして打ち破るかかという、それには「人間は神の子である、全智全能の神の子であって、全智全能が自分の頭にあるのだから決して忘れるものではない」という大自覚を人類に与えるこ

とが必要なのです。(中略)常に子供に対して「あなたは神の子ですよ。神の子だから必ず頭がよくて記憶力は好いのですよ」ということを教える。「あなたは神の子だから、本を一遍読んだら決して忘れるものではありません。先生から一遍聴いた話はもう決して忘れやしないのですよ。必要な時には必ず思い出せる」ということを常に言葉の力によって生徒たちの頭に印象するようにするのであります。そうして試験場又は実際問題に莅んだ時に、「人間は神の子である」ということを思い出して「自分は神の子だから、必ず憶い出せるのだ。必ずよい考えが浮んで来るのだ」と、こう心に唱えて、心を落着けて、さて問題に対したならば、必ずそこに出されていく問題に対する適当な回答が思い出されてくるのであります。人間の能力を発達せしむるには、そういうふうな子供るときから「我は神の子、無限力」の自覚を与えることが肝要であります。

(新編『生命の真相』第47巻44〜47頁)